

た。即ち、賃銀とか原料費とか資本消耗金額とかの合計である。術語で云へば、貨幣生産費である。この場合、一定率の利潤が加算されることは勿論である。

需要価格と供給価格の意味は、ざつと右の如くである。そこで、これがどんな工合に働いて均衡価格を得るかと云へば、それは従來の需要供給説と大同小異である。即ち、需要価格が供給価格より高ければ、供給者の利益は増すから、自づから、供給増加の勢が誘致される。供給増加は需要価格を低落せしめ、このやうにして両者は或る一點で均衡を得る。反對の場合には、反對の徑路を辿つて、同じバランスに到達する。孰れの場合にも、バランスを得た點で価格は定まる。これをマーシャルは均衡価格 (Equilibrium Price) と名付ける。

然もこの均衡価格には、三種の區別がある。以下にこの點を略述しよう。

### 九 三種の均衡価格

三種の均衡価格とは、

- (イ) 一時的均衡価格
- (ロ) 短期正常均衡価格

(ハ) 長期正常均衡価格  
の三価格である。

(イ)の一時的均衡価格とは、従來の市場價格のことだ。既に生産されてゐる商品量だけに就いて生ずる均衡價格である。これも均衡價格には違ひないが、何分にも現在量の商品に就いてだけ生れる價格だから、本當の徹底した均衡は得られない。若しその均衡が眞の均衡と比較して高い點で得られたならば、利益が増すから生産は増すし、反對ならば生産は減少しなければならぬ。このやうな生産の伸縮には二種の段階がある。その一つは、現在の生産設備數量をその儘として伸縮が行はれるものと、更に進んで生産設備の量までも變化して伸縮が行はれるものとの二種である。この最初の段階で出來上る均衡價格が短期正常價格だ。後者の段階にまで突進んで出來上るものが、長期正常價格だ。これが所謂自然價格に該當するものである。勿論、總ての價格が、この三段階を経て決まるものではない。需要価格と供給價格の状態は、決して一樣ではないのだから、或時は兩者の一定の關係が持續され、或時は忽ちに變化するだらう。その工合如何によつて、均衡價格のどれにまで、それが及ぶか、決まる譯なのである。



## 十 一つの批判

マーシャルは、いま述べた長期の關係を、一種の靜態と考へた。これは均衡が持續されてゐる状態だから、これを靜態と考へるのは、決して間違ひではない。だが、問題はこのような靜態的研究にだけ止つてゐてもよいかといふ點である。靜態とは、換言すれば、一つの型である。従つて、それは刻々に移つて行く文明の進化とか、經濟制度の變質とかを考慮してゐない。そこで、若しわたくし達が、現實の經濟事情を正確に理解しようと思へば、このやうな靜態的研究ではいけない。この缺點を除くためには、刻々に動いて行く經濟——即ち經濟の動態を捕へて、これを説明する動態經濟學にまで進まなければならぬ。

例へば、土地收穫遞減の法則は、既に誰でも知つてゐるやうに、經濟學上では重要な法則となつて居り、現に經濟を論ずる人々は、屢々この法則を用ひるが、實は、これは靜態經濟學の法則である。投下する勞働及資本量の増加に比較して、收穫量が増加しないといふのは、その勞働なり、資本なりの質が少しも變らぬものとして考へた場合の理窟である。若し、有効な新耕作法や新工夫の肥料が現れて來れば、同一量の勞働と資本とを以てしても、十分に生産を増すことが出来るのである。

別言すれば、收穫遞減の法則は靜態經濟學の領域内でのみ正しいのである。それは、最早や動態經濟學の法則とは成り得ないのだ。

この事は、單に收穫遞減の法則だけとは限らない。價格理論にしても同様である。同じ商品價格の變動でも、自由競争の十分行はれる資本主義の社會と、獨占の段階に入つた資本主義の社會とでは、變動の型も違ふし、従つて、之を説明する理論も異つて來る道理だ。自由競争華やかなりし時代には、工業品價格の變動の方が、原始生産品價格の變動よりも、その幅が大きかつた。が、しかし、獨占段階に入ると共に、獨占工業品の價格變動の幅は、却つて原始生産物價格のそれよりも小さくなつて來てゐる。

このことは、決して、單なる一二の例ではない。靜態經濟學の全理論に就いて言ひ得ることなのである。就中、靜態經濟學の最大の缺陷は、經濟制度發達の理論を缺いてゐることである。經濟制度の變化が急ピツチとなつた現代では、これを説明する術を知らない經濟學は、まことに影薄い存在と申さねばならぬ。

## 十一 ビグウとチャップマン

マーシャルの衣鉢を繼ぐ者に、例へばビグー教授、チャップマン教授などがあり、就中ビグーは其の名著「厚生經濟學」(Economics of Welfare)を著して、マーシャルの最高弟と稱される。それらの人々の所説を、こゝで解説する餘白は無いから、遺憾ながら割愛する。



たゞ、一言觸れて置きたいのは、大きな缺點を持ちながらも、抽象經濟學なるものが、依然として、存在してゐる理由である。

この疑問に對する解答は、新抽象派の理論的傾向そのもの、中にある。既に述べたやうに、その學派は消極的には「經濟發展の理論」を缺いて居る。積極的には「均衡理論」を基礎として立つてゐる。第一に「經濟發展の理論」を缺いてゐることは、換言すれば、經濟機構變化の要素が無いといふことは、現代の經濟機構が根本的に變化するかどうかの問題を回避することを意味する。謂はゞ現代の經濟機構を消極的ながら肯定してゐるのである。第二には、現代經濟組織が均衡のとれたものだといふことを、積極的に論證してゐる結果になる。そこにこの學派の大きな存在理由がある。現代の經濟學の中には、現代の經濟組織を指して、最も不均衡のものだと考へる見方も尠くないので、新抽象經濟學は、かゝる批判に對する理論的反批判として、現代でも、立派な存在理由がある譯なのだ。

## 第十二章 全體主義の經濟學

### 一 全體主義思想の發展

茲のところ十ヶ年ほどの間に、全體主義は世界の思想界に、極めて大きな地位を築いた。經濟學も、當然、その影響を受けねばならなかつた。

アメリカのルーズヴェルト大統領の解釋によれば、日・獨・伊の三國は全體主義國家であるさうだ。日本は兎も角、吾々から観ると、獨伊兩國は全體主義である。ところが、ファッシスト學者ウイライに言はせると、ファッシズムは伊太利獨得のものださうである。人によつては、ソ聯邦も全體主義だと主張する。これでは話が混亂して、何が全體主義だか捕へようもない。詳細に検討すれば、等しく全體主義と呼ばれてゐるもの、中にも、それぞれ他と異なる點もあらう。同じ猫にも三毛あり、黒猫あり、ドラ猫があるやうなもの



だ。但だ、毛並や形に差はあつても、猫は猫である如く、全體主義には共通したものがあつて違ひない。こゝでは、それを探し求め、その全體主義が、經濟思想の上では、どのやうな形態を採つて流れて來てゐるかを見るべし。

## 二 國家主義か？

全體主義と聞いて、先づ、わたくし達の頭に浮かぶことがある。それは、強い國家主義的傾向である。これは單にわたくし達がそう感じるだけでなく、ヒットラーの演説や政策を研究し見ても、國家主義的色彩の強いのは事實である。併し、國家主義といふならば、何も全體主義に限つたことではなく、随分古くからある思想だ。ギリシヤの大哲學者プラトンは理想主義哲學の元祖であるが、尤も強烈な國家主義思想の持主であつた。例へば、婦人の共有や小兒の共同養育などといふ突飛なことまで主張した。國家主義と婦人の共有とにどんな關係があるのか？ 婦人共有の如きは風紀を亂し、寧ろ國家に有害だと現代の讀者は考へるであらう。だが、プラトーンにはプラトーンの理窟があつた。人間はどうしても私慾や偏頗な心を抱き勝ちなもので、これこそは國家にとつて最も有害なものである。然るに自分の妻、自分の子供があると、どうしても他人よりはこれに深い關心を持つやうになり、従つて不公平になる。これは國家に有害である。そこで、妻は共有にし、

「如何なる親をしても、その子を知らしむ可からず。如何なる子をしてその親を知らしむ可からず。」といふ主張が樹てられた譯である。これに對して、プラトーンの弟子アリストートルは、親子は似るからさうは行かないと、皮肉なことを云つてゐる。共有は妻子だけではない。財産も勿論さうである。ところが、ヒットラーは猛烈な反共產主義である。ソ聯と結んで以來、最近は妙なことになつたが、元來、共產主義には反對だつた。ムツソリーニも依然として反共產主義である。だから、全體主義即ち國家主義とも斷定出來ない。

## 三 全體と個體と

One for all, all for one (個は全の爲、全は個の爲)といふ言葉がある。これは全體主義の根本思想を最も簡單に言ひ現したものと考へられる。オットマル・シュバン (Othmar Spann) 舊奧太利の經濟學者、社會學者で限界効用學派に屬する人の「全體主義の原理」には、全體は獨自のもので、個人はその構成部分として存在するに過ぎない。が、亦、全體との關係に於て最もよく個體は發展し得る、といふ意味のことが書いてある。

處が、この「個は全のため、全は個のため」といふ文句は、實は、全體主義者の言葉ではない。嘗て流行した社會連帶主義 (Solidarism) の標語なのである。人は孤立して生きてゐるものでなく、社會といふ大きな



集團の中で生きてゐるのだ。従つて、個人は相互に連繫してゐる。逆に、社會は個人の連帶から出來てゐる。そこで、個は全の爲、全は個の爲、と云ふ標語が生れる譯だ。全體主義思想の中にも、かゝる思想が含まれてゐることは、今述べたシュパンの言葉からも、十分に汲み取れる。さりとて、連帶主義と全體主義とは、これまた同じものではないのである。

#### 四 個人主義排撃

全體主義(Totalism)は個人主義(Individualism)と對立する思想として生れて來た。そこで一應、個人主義を述べなければ、全體主義の意味が把めない。極く簡單に、個人主義について書かう。

總じて、社會とか國家とかを考へる際に、常に問題となるのは、これらの人間集團と個人との關係である。個人主義と稱するも、必ずしも一樣ではないが、大體に於て彼等は個人を基礎とし、中心として社會を考へる。その結果、社會を單に個人の集合體だと觀る。換言すれば、個人を寄せ集めたもの、之が社會だと考へる。個人主義經濟學の大成者たるジョン・スチュアート・ミル(本書第五章、「彷徨よへる經濟學」参照)は名著「論理學體系」の中で、ハツキリさう述べてゐる。その爲に、個人主義的社會觀を以てしては、社會特有の機能や性質は考へられない。それは結局、個人の性質、機能に歸着して了ふ。だから、ミルも、社會の性

質の中には、個人の性質に基かないものは見出し得ないと説いてゐる。ところが、全體主義は、この根本的な見地に反對するのだ。

#### 五 何故全體主義は問題となつたか?

以上は、まことに不十分な説明ではある。が、しかし、全體主義思想とは、大體さうしたものなのだ。個人主義の反對思想と申すより他には適當な説明がない。これによつても、全體主義なるものが特に新奇な思想といふ程のものではないことは明かであらう。それにも拘らず、これが世界の問題となつてゐるのは、決して思想として價值が高い爲ではない。獨、伊兩國、特に獨逸が近時軍事的外交的に大活躍を行つてゐる爲である。若し、獨逸や伊太利が、アフリカ邊の小國であつたなら、全體主義思想は、とても、世界の問題とはならなかつたであらう。つまり、全體主義の隆盛は、これを採用した國の勢力のおかげだと云へる。

果して、さうだとすれば、全體主義の興隆は、一見、まことに偶然なもの、やうに思へるかも知れない。併し、これは私の説明が足りないからである。成程、全體主義は獨、伊の國力と共に盛になつたのであるが、同時に、今日、わたくし達が見聞する全體主義は、強い國家に於て、なければ勃興して來ないことも事實である。何故ならば、全體主義は高度に發達した資本主義經濟から生れ、これと固く結び付いてゐるからであ



る。

それなら、英、米はどうしたと、讀者は、或は、反問されるであらう。英、米は確に最高度に發達した資本主義國家である。が、現在では、民主々義を看板にして、全體主義と對立してゐる。併し、これら兩國家群の對立は、果して主義の對立であらうか。赤色國家とドイツとが協定を結ぶ世界の有様を顧みていたゞき度い。ものごとを正面からだけ見れば、正しく複雑怪奇な世の中である。だから、嫌應なしに、ものゝ裏面をも見なければならぬ。裏といふよりも、底を見なければならぬ。

さてその底である……。試みに民主々義國家群と全體主義國家群とを比べて、國家的行動を研究する場合、大した相違は、勿論ない。先づ大軍備だ。次には國家權力の集中化だ。第三には經濟統制だ。軍備競争に就いては説く必要もないが、國家權力の集中や經濟統制の點でも、民主々義國家と全體主義國家とは程度の差に過ぎない。然もその差は、徐々に縮小されてゐる。といふ理由は、全體主義國家では國家權力はこれ以上集中出来ない處まで、つまりヒットラーやムツソリーニがやらうと思へば何でも自由にやれる處まで集中されてゐるからである、謂はゞ行止まつてゐるからだ。ところが、民主々義國家の方では、着々として國家權力が集中されつつあるからである。例へば、ニューデイル（ルーズヴェルトが行つた新經濟政策）の施行によつて、米國政府の權力が強化されたことは非常なものである。經濟統制にしても、ニューデイルそのものが、既に自由主義とは遠く隔つたものである。貿易政策を例に採つてもいい。自由貿易の元祖——英

國が、輸入割當制を施行してゐる有様ではないか。だから全體主義國と云へ、民主々義國といふも、結局はボラとイナの違ひである。寧て民主々義國もイナからボラに成長する時が來ることは間違ひない。これを一言で言ひ現せば、民主でも全體でも、その一般的傾向はファツシズムへの進展に外ならない。

何故か？

以下それに答へよう……。

## 六 ファツシズムの母胎

日、英、米、獨、佛、伊！

世界の強國といはれる程の國々は、何れも皆、揃つて獨占資本主義經濟の國である。これこそファツシズムの母胎なのである。一口に資本主義と呼ぶけれども、これにも成長發展の度合によつて、いろ／＼な區別がある。大きく分ければ、自由競争資本主義と獨占資本主義の二つである。一つ／＼の細かい説明は省くが、現代經濟界に見るやうな小數の巨大な會社、銀行が、産業界の實權を握つてゐる資本主義が、獨占資本主義だ。それと異つて、圖抜けて大きいものも無く、謂はゞ團栗どんぐりの背くらべのやうな工合に、多數の銀行、會社が、互に競争し合ひ、どれが支配權を持つてゐる譯でも無いのが、自由競争資本主義だ。スタンダード石油、



ユー・エス・スチール・コーポレーション、ジェネラル・エレクトロトリック、(以上米國) イムペリアル・ケミカル・インダストリー(英) イー・ゲー染料(獨)などは世界的な支配權を持つ會社である。日本でも有名なバイエルのアスピリンはイー・ゲーの製品だ。新聞の生絲相場欄にスチール株のことが出てゐるのは、ユー・エス・スチール會社の株式だ。スチールと云へば鋼だから、それと生絲ではチト縁遠い話だが、生絲の値段は御承知の様にアメリカの景氣に左右される。ところが、スチール株の高下はアメリカの景氣のパロメーターとなつてゐる。それで、鋼と生絲とが結びつくのである。一國全體の景氣、然もアメリカのやうに巨大な經濟界の景氣を、たゞ一、二の會社の株價が指示するのである。如何に巨大なものであるか、想像されやう。併し、これなどは、まだ部隊長程度だ。軍司令官ではない。軍司令官はアメリカではモルガン、歐洲ではロスチャイルドだ。米國や歐洲の政治、經濟の最高指導權はこの御兩人が握つてゐるとも見られる。

これは勿論御兩人が何百億の金を持つてゐるからのことではある。が、たゞそれ丈では駄目だ。この金で他の様々なもの、支配が出来る様な組織が出来てゐなければならぬ。株式會社こそは之が爲の最良の組織である。一株一票として、過半数を握れば、その會社の支配が出来る。それ故、自己資本の約倍額だけの資本を左右出来る。然もこれは理窟で、實際は小株主が、どの會社でも相當に多いから、四分の一位の株式を握れば、先づ大丈夫である。それも、日本のやうに、商法で一株一票と定つて居り、優先株以外には殆ど特殊株の發行を許されてゐない國の場合で、さうなのだ。米國のやうに低額面株(Under valued stock・普通

は百弗株であるが、特に二弗位の小額株式を發行し、株主總會に於ける投票權は百弗株に同じ)や、議決權の有る株と、議決權の無い株の發行が許されてゐる場合には、自己資本の十倍、二十倍もの巨大な資本を左右し得られる。かゝる組織を下から順々に積み重ねて、最後の持株會社で全體を押へる。俗にピラミット型といふが、下が馬鹿に大きなピラミットである。モルガンやロスチャイルドは、金融機關を通じて、自己の資金を、この大組織網の中に深く入り込ませ、之によつて全產業界を支配してゐる。換言すれば、金融王に依つて經濟統制が行はれてゐる。これが獨占資本主義經濟の要項である。獨逸やアメリカでは、特にこの點が強化されてゐるが、他の強國でも、程度の差こそあれ、このやうな傾向は一般に行はれてゐるのである。

既に經濟が、或程度統制され集中されて居れば、これを處理する政治も、亦、集中されねばならない。獨裁者たると大統領たると、將また、議會に責任を有する内閣首相たるとを問はず、その權力が次第に擴大強化されつゝあるのは、決して單なる流行や思想上の問題ではない。實際政治の基礎たる經濟が變化したから、それに應ずる必要からである。

併し、この一般的傾向が、それ〴〵の國で、具體的に現れる程度や形式は、勿論一樣ではない。多少は國民性にも影響される。が、主としてその國の經濟力、特に重工業資源や市場の廣狹に左右される。所謂「持たざる國」は、自國の領土外に之を求めざるを得ない。ところが、不幸にして門戸は解放されてゐない。好んで軍備を擴張する譯ではないが、經濟力の不足を軍備で補はねば、以て國力の進展を圖り、國威を維持す



ることが出来ない。獨、伊の軍備が急速に擴大されたのは、かうした必要に迫られたからである。然るに、經濟力は豊でないのだから、經濟を自然のまゝに放置して置いたのでは、何事も成就し得ない。勢ひ、統制を強化する。獨、伊の經濟統制が、英、米などに比し、より著しく強化されてゐるのは、これが爲である。全體主義經濟思想はこのやうな事情から生れ、これを處理する爲の思想たる處に、その存在理由がある。

## 七 經濟は手段

社會にせよ國家にせよ、人間の集團であることは云ふ迄もないが、集團全體の利害と、それを作つてゐる個個の人の利害とは、必ずしも常に一致するものではない。併し、既に全體的利益を第一とせねばならぬとすれば、無理にも、個別的利益は之を犠牲に供せざるを得ない。併し、單なる強制では政治的にも面白くない。亦、實效も乏しい。それ故、社會道德的觀念を強化し、その力に俟たねばならぬ。そこで、全體主義は國家觀念と社會倫理思想とを極力強調する。「公益は私益に先んず」(Gemeinnutz geht vor Eigennutz)之はナチス經濟政策の指導原則である。

敢てナチスに限らない。正義とか道德とかを強調する思想は、總じて經濟生活の價值を低く見るものである。全體主義も御多分に洩れない。ヒットラーの演説や著書の中にも、「國民は經濟の爲に生きるものではない」とか、「國民の興亡はその經濟綱領の善悪によるものではない」といふやうな言葉が屢々見出される。では、經濟は何の爲に存在し、又、經濟以上に價值高きものは何であらうか？

ブーフナー(Büchner)に従へば、經濟とは、より高い目的遂行の手段であつて、そのより高い目的とは、國家國民の維持發展である。されば、經濟なるものは、從來の自由主義者や學者のやうに、之を政治や國家から引離して、一個の獨立したものと考へる可きではない。社會協同體の一部として、他の部面、特に政治と不可分であり、且つ之に従屬するものと考へべきである。政治とは經濟を綜合したものだ、と言つた人がある。全體主義は經濟に對する政治の優越を主張する。それ故に、從來の學者が主張した經濟の自律性、即ち經濟には經濟の法則があつて、經濟の運行はその法則に従ふものだ、との考へ方を否定し、經濟は政治によつて、又、政治の爲に、自由に變更し創造し得るものだと考へてゐる。このやうな考へ方が正しいか、どうかは別として、人間の創造力を強調する思想は、確に國民を元氣づける。ヴェルサイユ平和條約の桎梏を突破せんとする獨逸政府と獨逸國民の前途には、至難ともいふべき困難が横たはつてゐる。「やらうと思へばやれる！」斯う考へなければ、敢てこの難事業に當り得るものではない。この意味で、ナチスの經濟觀は、多分に現實的意義を持つてゐる。



## 八 勞働と資本

既に「全體」を主眼とし、經濟はより、高い目的を達成する手段と看做され、且つ亦、經濟は政治に従屬するものだと考へるならば、國民經濟は、當然に、統制されなければならない。では、どういふ工合に實行しようとするのか？

ナチスの見解では、夫々異つた經濟的活動を營む「職能團體」を組織し、之を相互に密接に連絡させ、それでやつて行かうとするのである。然も此場合、個々の團體は、人體の諸器官が身體全體の一部として働く様に、全體の爲に活動せねばならぬ。このやうに考へるからには、資本及勞働に關しても、從來とは異つた考へ方をしなければならぬ。ナチスに依れば、從來の經濟的原動力は利潤であつた。然るに利潤生産は全く私欲の爲に行はれるものだから、國家、國民の必要とは一致しない。寧ろ實際には大資本の利益が常に重んぜられた。これではいけない。全體主義は私有財産を否定するものではない。併し、之を用ひる場合には、飽くまで公益先行の原則に従はねばならぬ。勞働にしても、これを一種の商品と見る思想は、斷呼として排斥される。勞働及勞働者は單なる生産要素と考へられてはならぬ。國民の最大な財産は、貨幣や機械ではない。健康にして眞面目な思想を有する人間である。それはマルキシズムのやうに、被搾取階級と見做さる可きで

はなく、國民協同體の最も價值高い成員だと考へられる。

斯のやうに考へれば、企業家と勞働者とは決して相對立する二大階級ではなくなる。その關係は勞資協調など、いふ生緩いものではない。一體となつて國家全體の爲に奉仕する人々である。されば、勞働者は奉仕者と呼ばれ、企業家は指導者と呼ばれ、ヒットラーは總統 (Reichs Führer 帝國指導者) と呼ばれる。

これを実現するために、企業家に對して特別に何も行はれてはゐないが、勞働者に對しては所謂「勞働戦線」(Arbeitsfront) が結成された。一九三三年五月二日國民勞働祭の翌日、ナチスの經營細胞部は、ライ博士指揮の下に自由勞働組合本部を襲つて多數の幹部を捕へ、其他一切の勞働組合を強力的にヒットラーの麾下に服せしめた。他方、二月四日には「ドイツ國民保護ニ關スル命令」などによつて、反對黨を弾壓し、七月十四日には社會民主黨を壊滅せしめ、斯くてドイツ勞働戦線結成の基礎工作を施した。相當過激な手段を用ひたものだ。が、しかし、ライ博士の言ふ「ドイツ勞働戦線の使命は協同社會への教育である。更に職分協同體的建設に盡力すべき人間を作る」爲には、蓋し、止むを得なかつたのであらう。

## 九 伊太利のファッシズム

轉じて、伊太利を一瞥しよう。これはファッシズムの母國である。抑々ファッシヨなる言葉はこの國から出



た。それはグループとか集團とかの意味だ。だから、グイライイが、これは伊太利獨得のものだといふのも無理はない。亦、その組織には確に伊太利的のものがあられるけれども、根本の傾向からみれば、矢張りナチズムあたりと軌を一にして居る。その發生の事情にも同様なものがある。ナチズムが戦後ドイツに於ける左翼の興隆に反撃すべく起つた如く、伊太利ファッシズムも極左運動への猛烈な反動として、ムツソリーニが始めたものである。伊太利の労働運動は最も極端な種類のもので、赤色労働者による暴動や工場占領が頻發した。ム首相自身も桃色左翼だつたが、途中から轉向して、かの劇的なローマ進軍とはなつたのである。

伊太利ファッシズムの特色は、組合主義を國家組織の基本原則としてゐる事である。この思想が出来上る迄には、いろいろの由來とか徑路とかがあるが、之を擴大して「組合國家」なる觀念を、最もハツキリ示したのは詩人ダモンチオである。これも讀者が御承知の事であるが、「死の勝利」などいふ一種の厭世的小説を書いて居たダモンチオは、大戦從軍と共に大いに認識を改めたと見え、頗る愛國的實行的な人物となり、所謂フィウメ占領を敢行した。この時、彼が作つた憲法に依れば、國民をその職業に従つて十種に分ち、各々組合を作らせる案であつた。之はフィウメでは實施されなかつた。却つて伊太利に多くの讚成者を見出し、將來の伊太利國家組織に多くの示教を與へたのである。

無論、伊太利ファッシズムも「全體」を主眼點とすることはナチズムと同じである、併し、學者達の論調をみると、同じ全體尊重論であつても、協同主義的傾向がナチの學者のそれよりも濃厚のやうに見受けられ、

その反面に、官僚主義、命令主義の色彩が稀薄である。實際組織の上で、少くとも、形式上は、組合制度を下から組立て、行つてゐる。誤弊はあるがナチ程に軍隊組織的ではない。

細かい點はいろいろ變更されて行くから省く。大體に於て、組合は雇主組合と労働者組合に分たれる。そして各々が産業別となつてゐる。雇主組合に就いて云へば、農、工、商陸運及内地水路、海運及航空等に分れ、労働者組合も之に對應して同様に分割さる。其他に藝術家、醫師、文筆家等を一括した組合も作られてゐる。そして勞資の組合は夫々全労働聯合と全雇主聯合に綜括され、組合省が之を統轄する組織となつてゐる。

## 十 「國民主義」と「國際主義」

ナチにせよファッシズムにせよ、孰れも國民主義を強調することは周知の通りである。

これはどういふ意味からかと問へば、その主眼點が反マルクス主義だからである。マルクス主義は労働者に祖國なしとか、萬國の無産者よ團結せよといふ宣傳文句でも解る通り、國際主義（インターナショナルイズム）に立脚してゐる。之に對立する思想としては國民主義より他に無い。之に依つてマルクス主義的國際運動を断ち切らうとする譯である。この場合、國民主義、國家主義の思想を與すのには、どうしても自國は他國とは違つて、獨得の價值を持つものだとの觀念を植ゑつけねばならぬ。その爲めには歴史を尊重すること



が最も手つ取り早くもあるし、亦、効果的でもある。全體主義國家に於ける歴史尊重は、この意味合で行はれるのである。

記憶の良い讀者は、既に述べた歴史學派を想起されるであらう。歴史學派並びに思想的先驅たるローマン主義經濟學は、ドイツ國民の經濟學を主張するに當つて、頻りと歴史を振り廻したものである。この點、輓近の全體主義經濟思想と一脈相通するものがある。いや、一脈どころか、二脈も三脈も相通じてゐる。經濟生活に對する精神生活の優越性を主張したり、營利的合理主義に反對したりする點は、孰れも相似通つてゐる。亦、尙農主義、反共產主義の色濃い點なども同様である。

併し、通説によると、成程、兩者は非常に似ては居るが、一つ根本的に違つた點があると説いてゐる。それは舊い國民主義は、多分に懐古的詠嘆的であつた。これに反し、新しい國民主義は未來的積極的だといふのである。これは一應尤もな意見であるが、舊い國民主義と云つても、ローマン派と歴史學派とは、この點に多少の違いがあることを注意しなければならない。ローマン派は明かに懐古的である。が、歴史派は稍々趣を異にする。その先驅者フリードリッヒ・リストは國民主義の立場から自由貿易に反對して、保護貿易を主張したが、本書でもその際述べたやうに、彼の保護主義は、國內工業が幼稚な間だけ行ふ可きもので、充分成長した曉には、當時最も新しい最善の制度と考へられた自由主義に進まうといふ計畫だつたのである。だから、懐古主義かどうかによつて、新舊兩者を區別してゐる説は、多少割引して考へなければならぬ。

いのである。

但し、割引してみても、新國民主義者の方に建設的積極的主張が多いことは事實である。ヒットラーの「第三帝國」なる言葉は、最も良い例だ。

この新舊兩國民主義の差はどこから出て來たのであらうか？

第一には、昔と違ひ、近頃は政府の権力が強く、國民經濟も組織化されてゐるから、事實上、相當なことをやれる。やれると思ふから言葉も勢がつく。第二には現代の國民經濟、就中、全體主義國家の經濟には、容易ならざる困難が発生してゐる。良い加減のことでは打開され得ない。然も打開政策の遂行に當つて、國民大衆が負擔すべき犠牲は非常に大きい。國民をしてこれに耐えしめんが爲には、積極的理想を掲げて、希望と勇氣とを振り起させねばならぬ。全體主義國家の首腦者連が、強烈なる辭句を用ひて、屢々大演説を試みる所以は、こゝに在る。

## 十一 ファッシズムは世界的傾向

全體主義經濟思想の大意は、以上で了解が行つたものと思ふ。

併しながら、果してその實際に行ふ處が、その言ふ處と一致してゐるであらうか？ この質問に對しては、



一々こゝで事實を述べる餘白は無いが、私は、否！ と強く否定せざるを得ない。悲しいことだが、事實だから仕方がない。何故ならば、若し全體主義の主張が、額面通りに實行されるならば、現代の世界に行はれてゐるよりも遙に道徳的な、そして幸福な經濟生活が實現してゐる筈だからである。

今や民主、全體の兩國家群は、文字通りの死力戦を闘はんとしてゐる。勝敗の豫想は、素より不可能だ。たゞ、孰れが勝ち孰れが負けるにしても、それは「主義」の良否優劣を示すものではない。何故ならば、既に述べたやうに、両者は結局、廣義に於けるフアッシュズムに屬するもので、いはゞ狸と狐の喧嘩に過ぎないからである。

## 第十三章 轉換期の動態經濟學

### 一 經濟學の轉換

アダム・スミスが經濟學を建設してから、既に百六十年餘の年月は過ぎた。その間、輩出した有名無名の經濟學者は、幾十人、幾百人、いや、幾千人……。經濟學そのものにも千姿萬容な變遷があつた。この變遷の荒筋は、本書の讀者諸賢ならば、既に御承知であらう。ところが、今や經濟學は、更に大きな轉換を行はうとしてゐるのである。いや、既に行ひつゝあると考へてよい。

それはどんな轉換であるか？ そして、どうしてそのやうな情勢が生れて來たか？ これが、最後に説かうとする課題である。

既に、アダム・スミスの學說について述べた際に、書いたことであるが、昔は經濟學を英語でポリテイカ



ル・エコノミー (Political Economy) と呼んだものだ。文字通りに譯せば、「政治経済学」である。英語ばかりではない。我國の経済といふ文字は、「経国済民」即ち國を治め民を濟ふといふところから出て來てゐる。徳川時代にも、経済とか経済録とかの文字を冠した書物が出版されてゐる。しかし、その内容からみれば、経済学のこと書いてはあつたが、それは、今日でいふ経済学ではなかつた。寧ろ政治学の本であつた。

経済学と政治学とのこのやうな結合は、遠くギリシャ時代からのことである。この兩者を、兎も角も切離して、経済学を獨立させたのがアダム・スミスの最大な功績であつた。尤も Political Economy といふ文字は、習慣の上から、其後も永く使はれてゐたが、こゝ三四十年來、Economics といふ文字が段々に使はれるやうになつた。それと共に、實際に於ても政治と経済との關係は少くとも表面上は、非常に間接的となつた。國家は、原則として経済には立入らない方針を採つて來た。所謂「自由経済」とか「自由主義経済」とか唱へられたものがこれだつた。

ところが、最近の實情はどうであらうか？ 果して、國家は國民経済に立入らないであらうか？ 全く正反對である。

往々、國家自らが、さまざまな會社を作つたり、企業を經營したりしてゐる。國家の経済への接觸介入が進行して來てゐる。今日の實情を一瞥すれば、このことは何人でも、直ぐ了解出来ることである。一般には、斯うした状態は所謂「非常時」が齎したものであるといふやうに考へられてゐるかに見受けられる。

併し、それは、決して正しい認識ではない。勿論、非常時到來の爲に、國家の経済的干與は、目立つて、且つ急速に強化されては來てゐる。が、その眞因は他にある。眞の原因とは何か？

## 二 経済機構の變化

外でもない。経済の機構が變化したからである。

どう變化したか？

一言で盡せば、カルテルやトラスト、實例で示せば大日本紡績聯合會とか、王子製紙とかの巨大會社乃至は會社聯合が、夫々の關係産業の分野で、強大無比な獨占的地位を獲得したからである。その結果、自由競争を激減させ、強力な統制力を取得した。経済学の術語で謂ふところの獨占資本主義體制が確立されたのである。

無論、経済学が事實を説明する學問であるからには、事實が變化すれば、経済学の内容も變化せざるを得ない。さうした理由で、経済学に轉換期が訪れて來たのである。

今日は経済学の過渡期である。



### 三 自由競争の退却

經濟學轉換の第一歩は、自由競争論の否定である。嘗ての經濟學は、常に自由競争を前提として議論された。謂はゞ自由競争は、スミス以來、經濟學の大殿堂を支へて來た大黒柱であつた。

自由經濟の時代には、確に自由競争の力が支配的であつた。だから、これを前提とすることは十分に正當であつた。と、同時に、今やその支配力が失はれたからには、これを大黒柱とする經濟理論が、根本的に動搖し始めたのも、これまた當然である。このことを具體的に申せば、價格論を中心とし、基礎として來た經濟均衡理論が崩壊したのである。

スミスにしろ、リカルドオにしろ、將又、マアシアルにせよ、商品の價格は需要と供給の競合によつて定まり、この價格が基準となつて經濟生活全體の調和が採れるものと説いた。供給が不足すれば、需要の減少が無い限り價格は上昇する。さうすると、一部の需要者は市場から退いて、こゝに需給のバランスが保たれる。反對の場合にも、方向こそは逆ではあるが、矢張り、或點の價格でバランスがとれる。

單に商品の價格ばかりではない。勞賃にしても、金利にしても、總て、かうした作用によつて定まるものと考へた。そして、このことは、勿論、自由競争が行はれて居ればこそである。

### 四 獨占價格の出現

ところで、例へば、昭和十四年九月十八日の價格停止令下にある日本の商品價格や勞賃は、實際の需要狀態を表現してゐるか云へば、全然それを表現してはゐない。敢へて總動員法の發動を俟つまでもなく、巨大獨占企業の商品は、所謂「獨占價格」であつて、故意に釣上げられた値段である。従つて、スミスやマアシアルが考へた様な價格ではない。ドイツのワーゲマン……この人は世界有數の景氣研究所を持ち、景氣變動の研究に關しては、アメリカのフイツシャー、ソヴェートのヴァルガと共に、世界三學者の一人である。

このワーゲマンの調査によると、獨逸の工業生産物價格の半分は、所謂「自由競争價格」ではない。然も現代工業の中心を構成する重工業の生産品に至つては、殆んどその全部が、自由競争價格とは反對の、所謂「拘束價格」乃至は「獨占價格」である。従つて、拘束又は獨占價格が、經濟一般に對して持つ力は、逆も五〇%位ではない。

扨て、このやうな根本的變化は、そも／＼いつ頃から世界の經濟を訪れたのであらうか？ 凡そ第二十世紀の初頃からである。そして、それが最も決定的となつたのは、世界大戰を契機としてのことであつた。既に獨占的傾向を示してゐた列國資本主義は、戰時經濟編成の爲に、急激にその力を伸展させたのである。現



在の日本經濟は、取りもなほさず、それである。だから、世界各國と同じく、日本にも「轉換期に於ける經濟學」として、この經濟の動きに即應する「動態經濟學」が流行して來たのである。

## 五 大恐慌と經濟學

一九二九年秋、ウォール街に捲起つた古今未曾有の株式大恐慌は、既にその前年下半期から農業國家を襲つてゐた農業恐慌と相重なつて、世界經濟を一舉に地獄の釜の底へ叩き付けた。貿易が三分の一程に激減したことを見ても、その恐慌の激烈さが想像される。驚いたのは經濟學者達である。ほんの数ヶ月前まで、大統領フーヴァのインフレ政策に幻惑されて、經濟政策が發達すれば恐慌は無くなるなど、呑氣な夢を描きつづけてゐた頭腦では、この大恐慌による激變を説明することが出来なかつた。マアシアルと相並んで、大理論經濟學者と稱されたグフタフ・カッセル教授が、恐慌の原因は、金の偏在にあるといふ珍説を提唱したのもこの時である。極く一部の異教徒的經濟學者を除いては、事實上、どんな經濟學者も、この恐慌に關して、何ら世人を首肯させるに足るだけの説明を與へ得なかつたのである。

理窟が解らないのだから、策の立てやうがない。無數の恐慌對策論者が現れたけれども、一として實際に役立つものはなかつた。當時、次々と現れる新刊經濟書を翻譯してゐた一大學教授は、遂にその無用さにあきれて、これを悉く放擲したといふ。舊經濟學のこのやうな理論的、政策的無能は、遂に強い不信用を經濟學の上に齎らした。經濟學者たる者は、嫌でも應でも、深く反省せざるを得なかつた。かくて大恐慌は經濟學轉換への一大衝撃となつたのである。

動態經濟學者が口を開けば、實踐々々と言ふのも、ジョアン・ロビンソンが「實際家がパンを求めてゐるのに、經濟學者は彼に石を與へるとの非難は、實際家からすれば全く當然である」と云つて、實際家に叩頭しつゝあるのも、つまりは失はれた經濟學の信用を取戻し度い一心からのことである。併し、たゞお世辭を並べただけでは、信用は恢復されない。どうしても「實際家」に役立つやうな經濟學を、「學者」は作り上げなければならぬ。この必要から生れて來たものが、今日の動態經濟學である。

と、云つて、それは決して經濟學轉換の機運そのものが、かゝる實際家の要求に迎合せんとする學者達の意圖から生れたといふのではない。機運そのものは、今も述べた通り、經濟の根本が變化して、從來の經濟學が著しく不適切となつた處から生れたのである。但だ、この機運を現在の「動態經濟學」にまで具體化したことだけが、「學者」の意圖に出たものである、といふ意味なのだ。

## 六 動態經濟學の由來



扱て、代つて現はれたのが動態經濟學である。

動態經濟學とは何であらうか？

そも／＼動態經濟學又は經濟動學(Economic Dynamics)とは、動態經濟學又は經濟靜學(Economic Statics)に對立する名稱だ。力學上の言葉から出たものである。力學には靜態力學と動態力學とあつて、靜態力學とは、靜止してゐる物體又は均衡を保ち乍ら運動する物體に關する理論である。動態力學とは、物體の運動及びその運動を惹き起す力の理論を意味する。

この言葉を社會科學に持込んだ最初の人は、社會學の創始者たる佛人オーギュスト・コント (August Comte) である。之を經濟學に用ひた者は、コントの弟子とも云ふ可きジョン・スチュアート・ミル (J.S. Mill の父) であつた。其の後、多くの經濟學者がこの二つの言葉を用ひてゐるが、その意味は必ずしも一樣でない。コント自身は、靜學を以て社會の存立條件を説明する學理であるとし、動學を以て、その社會がどんな法則によつて變化して行くかを説明するものであるとした。ミルの見解も略々これに等しい。ところが、後年、これとは違つた風に解釋する者も出て來た。それに依れば、靜態經濟學とは「時間」の要素を取入れないものであり、動態經濟學とはこの要素を取入れる經濟學であると主張するのだ。これは少々解り難いから、一例を擧げて説明しよう……。

讀者は收穫遞減の法則と名付くるものを御承知であらう。その要旨は、一定の土地に對して勞力と資本とを順次に加へて行く場合、或程度までは、投下資本と勞力の増加率よりも、收穫の増加率の方が大であるが、或程度以上になると、資本と勞力を増せば、確に總收穫は増加するが、その増加の程度は次第に減少すると、教へる法則である。但し、この法則には一つの前提が隠されてゐる。それは栽培技術や肥料の改良等が全然行はれないといふことである。處が「時間」を勘定の中に入れると、この前提は必ずしも事實に合致しない。肥料が安くなるとか、又は同じ値段でもズット有效な肥料が發明されるといふやうなことが起る。この場合には收穫遞減は行はれず、却つて遞増が生ずる。動態經濟學は、かゝる變化を取入れて論ずるものだと主張するのである。ルドルフ・シュトレラーの研究に依ると、一般的に云つて、動態經濟學なる語の意味内容は、經濟學者間に夫々差異があるが、靜態經濟學の解釋に就ては、殆んど一致して居つて、いづれも均衡状態に在る經濟を研究するものと考へられてゐる。それ故、こゝでは解釋や語義には深入りしないで置く。

ところで、現在行はれてゐる動態經濟學は、どんな内容なり傾向なりを持つてゐるか？  
以下にその一斑を示すこと、しよう。

## 七 財政と市場經濟

新しい經濟學が採上げた主要問題の一つは、財政と市場經濟との關聯であつた。レブケ、コルム、フライ



デラー、フイツクなどの諸學者は、様々な見地から之を究明しようとして試みた。これは誠に尤もな試みで、自由主義の社會なら、國家が國民經濟生活全體の中に占める役割が小さいから、財政と市場經濟の關聯はさまで重要でない。ところが、近頃のやうに政府が様々な國家的事業を擔當し、企業國家と呼ばれるほどになると、國民經濟に於ける國家の役割は、俄然、重要となる。それと同時に、國民經濟と財政の關聯は甚だ深いものとなり、その一を考慮せずして他を論ずることは不可能となつた。これが財政學の方面に現はれたものが、ゴールドシャイド (Goldscheid) を開祖とする財政社會學の勃興である。その要旨を一言で説明すれば、財政現象は社會組織と根本的な關聯を持つもので、いはゞ、全國民經濟の動向が政治的に現はれたものが財政現象である。従つて、これを研究する財政學は、社會全般を研究する社會學の基礎となるものだといふのである。同時に財政學にしても、從來の財政學のやうに、單に國家の收入支出をどうするかといふ風な、技術論に終止することなく、財政と社會の關聯を究めなければならぬと、教へてゐる。イエヒト、ズルタンなどは、いづれも皆この流を汲むものである。

これを經濟學の側から観ると、生産された經濟價值が租税又は公債の形で國家に吸収され、それが國家支出となつて市場に放出される時、代つて多量の財が吸収される。國家の役割が大きくなればなる程、この作用は益々大となる。今や國家の營む經濟活動は、市場經濟に對して甚大な影響を及ぼしてゐる。そればかりではない。例へば公定價格制が布かれ、ば、市場の模様は一變する。物資統制にしても同様である。これら

はすべて舊い經濟學が面接したこと無かつた問題だ。新經濟學者が之を採上げたのは、必然の成行である。元來近世の經濟思想は中世の封建的、自給自足的經濟が崩壊して、流通經濟、交換經濟に入つた時に始まつたものである。その時、最初に起つて來た問題が財政問題だつた。ブッフエンドルフの租税論はその意味に於て近世經濟思想の濫觴と認められてゐる。今日新しい經濟學の發端が、再び財政問題に端を發することは、考へ方によつては、或種の因縁だ。更に亦、當時が歴史家の謂ふ「學藝復興期」(ルネッサンス)に當つてゐた爲、今日の新經濟學も、何か、その當時と同じやうな意味を持つて前途洋々たるかに感ずるものもあらう。けれども、これは愛す可きセンチメンタリズムに過ぎない。昔は中世の嚴格な拘束經濟から自由經濟へ移つて行かうとする過渡期であつたのだが、今は自由から拘束への轉換期なのである。前者は資本主義的な新經濟制度の發生期であつたが、現代はその資本主義の全面的な行詰り時代である。學者は、決して樂觀してはいけない。

## 八 政策と理論

現代の動態經濟學は何よりも實際を説明し、實際に役立つことを目標としてゐる。

と、云つても、決して從來の靜態經濟學が、經濟の實際と全く離れ、従つて何の役にも立たなかつたとの



意味ではない。それはその時代に於ては實際を説明し、亦、實際に役立つたのであるが、根本の經濟機構が變化した今日となつては、これでは不十分となつたのである。

わたくしは敢て不十分と言ふ。不用とは云はない。

何故ならば、如何に變化したとは云へ、自由經濟も獨占經濟も、等しく資本主義である。根こそぎ變化して了つたわけではない。例へば、自由競争は今日でも、まだ可成り行はれてゐる。果してさうだとすれば、之に基く均衡作用も、或程度までは存在してゐる筈だ。従つて、靜態經濟學の理論で説明される現象なり傾向なりが在るのだから、靜態經濟學が全く無用になつたのでは決してない。たゞその或部分が無用となり、或部分は相當に修正しなければならなくなつたのである。

併し、動態經濟學は經濟の根本的變化を認識し、飽くまで現實を説明することを目的としてゐるだけに、今日の經濟を説明する上には、靜態經濟學よりも、勿論、遙かに有能であり、有用である。

この現實性は、どこから生れて來てゐるか？

それは、動態經濟學が實踐を重んずるところから來てゐる。

實踐に役立つ爲には抽象論では済まされぬ。是非とも現實に立脚せねばならぬ。ところで、現實は日々變化し、動くものである。現實に立脚する爲には、この變化を認識し、之を採入れて行かなければならぬ。そこで動態としての經濟を目標とすることになるのである。

既に實踐を重んずるからには、動態經濟學は「政策」と離れることが出来ない。當然に「理論と政策の不可分」關係が主張されるのである。從來の經濟學では、理論と政策とは別だと考へられてゐた。例へば英國經濟學者シニオアは、

——政策は政治問題である。勿論その場合でも、政策は理論に基づかねばならない。さりとて、經濟理論だけでは不十分で、いろ／＼な要素を考慮しなければならぬ。さうなれば、最早それは、經濟學の範圍を著しく越えたものである。従つて、經濟學及び經濟學者本來の領分ではない——

と、説いたものである。現代の動態經濟學が、前述のやうに、理論と政策の不可分關係を主張するのに比べて、非常な差があるではないか。孰れの主張が正しいかは、茲では觸れない。が、しかし、動態經濟學がこのやうな議論をするには、一つの前提がある。それは「經濟に對する政治の優越」である。

## 九 政治と經濟

政治に對する經濟の優越性を主張した經濟學者は、他ならぬアダム・スミスその人であつた。國富論を繕いた者は、第五編を除き、殆んど全卷が「經濟」の説明と「政治」の有害とを力説するために費され、第五編に入つても、政府の爲すべき事としては、國防、警察、裁判、教育及び僅少な經濟的事業の五つが挙げら



れてゐるに過ぎないのを見出すだらう。リカルドオ其他の後継者達も、概ねかうした態度を持ち續けて來た。政治と經濟との關聯が、再び説かれるやうになつたのは、漸くドイツ歴史學派になつてからの事である。然るに、今や政治と經濟の地位は入れ代つて、政治の優越が叫ばれるやうになつた。これは何よりも社會の實際を反映してゐる。一々例を擧げる迄もあるまい。「官僚獨善」など、いふ攻撃的な言葉が、日本だけでなく、世界の各地に聞かれてゐるのも、官僚が、即ち政治が、強い力を經濟の上に振つてゐる證據である。何故かうした事態になつたかと問へば、前にも述べたやうに、自由競争の激減によつて、經濟生活が自働的調節作用を失つたからである。その結果、恐慌の恢復にしても、以前のやうに早くは行かない。慢性的恐慌の文字が使はれるやうになつたのも、こゝ十年來のことだ。簡単に申せば、經濟が自力更生力を失つたのである。自力を失つたからには、他力に俟たざるを得ぬ。その他力が即ち政治力である。

日本でも昭和六七年頃には、政府は頻りに農村自力更生を主張したものであつた。流石にこの頃は之を言はなくなつた。

斯うした實情は各國共通である。それが、經濟學を變化させたのだ。

## 十 動態經濟學とファッシズム

しかし、これだけではない。もう一つ重要な原因がある。それは動態經濟學がファッシズムと深い關聯を持つてゐる事である。讀者の中には、わたくしのこの言葉を容易に承認しない向があらう。それどころか、動態經濟學は社會主義的思想を背景にしてゐるのではないかと、反駁される方もあらう。その疑問は、なるほど尤もである。

何故ならば動態經濟學の主張者達は、屢々マルクス主義的口吻を洩らす人々が少くないからだ。口吻だけではない。随分とマルクスから理論を借用してゐる。例へば、現代經濟學の一方の旗頭シュマーレンバッハは、その「價格政策論」の中で、固定資本の増大が、自由經濟を破壊したと述べてゐるが、これなどは明かに、資本構成の變化に關するマルクスの學説を援用したものである。然も、その援用ぶりは頗る下手である。或は理論の説明に辯證法的方法を用ひ、或はマルクス主義と同様に、新カント哲學を排斥したりしてゐる。併し、ナチスも亦、新カント哲學を排斥してゐるのである。何よりも、「經濟に對する政治の優越」といふスローガンに於て、動態經濟學者はナチスの經濟思想と一致してゐる。本書の前章にも書いたことであるが、ナチス經濟の目的は、經濟の獨立性を否定して、之を國家の中に解消させることである。經濟は政治目的を遂行し、國家を改造する爲の手段に過ぎない。ブフナーの言葉で云へば「經濟とはより高い目的到達の遂行手段、即ち目的遂行の手段の組織」に過ぎないのである。この主張は、動態經濟學の主張と、瓜二つである。斯く説明すれば、恐らく抗議が申込まれるであらう……。「經濟に對する政治の優越」を説いたからとて、



それは、必ずしも現在の政治に従屬せよとの意味ではないと抗議して来るかも知れない。なるほど、動態經濟學者は、決して現在の政治に従屬せよと説いてはゐない。單に「政治」の優越を認識してゐるに過ぎないかも知れない。併し、このやうに解釋されるのは、恐らく動態經濟學にとつては迷惑千萬であらう。何故ならば、單なる概念としての「政治」など、いふ考へ方は、凡そ抽象的である。何ら實際に役立たない。従つて、實踐的傾向を強調する動態經濟學とは相容れないものである。だから、理窟をどうつけようとも、動態經濟學が現代に役立つことを主張する限り、その言ふ「政治」とは現代の政治でなければならぬ。そして現に、それが現代の政治に役立つてゐることは、思想が極端に、統制されてゐるドイツに於て、十分に存在を許されてゐる事實に依つて證明される。

——自由營利經濟から拘束營利經濟を通じて統制經濟へ——。

彼等のこの標語は、正に現代の政治經濟の方向と一致してゐるのである。

## 結 び

スミスに始まる經濟學を、その發端から説き起して、本書も、遂に最近の經濟學まで辿つて來た。その間、

生起し消滅し、又は隠れて行つた諸學派を、不完全ながらも、一通りは眺めて來たわけである。(社會主義學派については、種々の關係から説明を省略した。)僅か百七十年ばかりの間に、如何に多くの學説が、次から次へと流轉の姿をさらしたることか。今日、最新と思はれる學説でさへ、明日の運命は、もうわからない。

經濟學に永遠の眞理はないのであらうか？

わたくしは、率直に、「無い！」と答へなければならぬ。

社會は、經濟は、政治は、淀みにうかぶうたかたの且つ消え、且つ結んで瞬時も止まることが無い。

これを反映し、解明する經濟學も、また、瞬時も止つてはならない。かくてこそ、經濟學は鋭意研究すべきもの、その光明を永久に保ち得るものなのである。

(終)



## 經濟學史參考文獻

## 一、勉學と文獻

良い参考書の選定に成功することは、勉學の第一歩に成功することである。

いや、勉學の半ばに成功したも同様である。斯う云つても、過言ではないかも知れぬ。

それほどに、参考書を選ぶことは、大切である。同時に、また、大そう難かしいことだと思ふ。

大學や、専門の學校で、教師について、講義を受けてゐる場合ならば、さまざまな角度から、種々、學問上の注意を得られる。従つて、若しも、その人が、不適當な書物の教へに捉らへられ、誤つた先入觀念のやうなものを持つてゐるとしても、それを訂正し、打破する機會に恵まれるから、参考書誤選の悪影響を受けることは、比較的、少くて済む。併し、その場合でも、最初に不適當な書物の知識から、入つて行くと、その悪影響から抜け切れることは、なか／＼容易ではないものである。

況して、獨學自勉、中等學校卒業程度の知識を基礎として、今後、専門的な方面の勉學を遂げたいと思ふ者にとつて

は、良き参考書の必要は、絶對であると云つてよい。

世の中は、それ自身、一つの大きな教室であると、昔から、いみじくも教へられてゐる。この「世の中」といふ教室の中で、自ら學び、自ら修めて行かうとする人々にとつては、良き参考書こそは、まことに、偉大なる教授でなければならぬ。

わたくしどもは、この偉大な教授——良き参考書——の導きを光明に、正しい學問の殿堂に参じたいものである。生半可な知識の所有者が、自身の力量も顧みず、危険思想を盛つた書物などを讀んで、取つて返へしのかね誤謬の道に迷ひ込んでしまつたりして、苦しんだり、損をしたりしてゐる實例は、よく世間に見受けるところであらう。

經濟學史の勉強にも、何卒、よい文獻を求めて、これを参考とし、本書と併讀して欲しい。そうした目的から、先づ、初めに、經濟學史全般に通ずる参考書を掲げる。その次に、本書の各章別に従つて、参考すべき書物や、更らに、本書を讀んで得られた知識を基礎として、その知識の掘り下げの意味で、進んで讀むべき適當な文獻を、掲げて行かう。

## 二、經濟學史一般の参考書

經濟學史若くは經濟思想史に関する書物は、内外ともに、全く、無數である。著書も澤山ある。翻譯も數多く出てる。巷の本屋を訪ねて、經濟や思想に関する書棚をのぞけば、大抵の場末や田舎でも、四五種類の經濟學史に就いての書物が見受けられる。それだけに迂濶に求めると、後悔先に立たざる如き、内容浮薄なものも尠くない。

それらの群書中にあつて、次に掲げるものなどは、それぞれの意味で、最も權威に富むものであると信ずる。(以下



著書の敬稱を省略する。

經濟學史研究 高橋誠一郎著

慶應義塾大學經濟學部での重鎮であり、世界的な經濟學史學者として高名な教授が、その前半生の學的研鑽の結果を世に問ふべく、大正九年に公刊された。我國では、經濟學史研究書中の代表的著述の一と定評される。既に絶版となつて一般の書店では、手に入らないが、各地の図書館や、大きな古書店を探せば、手に入る。經濟學史一般の好文献であると同時に、本書の第一章附記の中に記した重商主義などに就いては、極めて綿密な研究が發表されてゐる。經濟學史に關する書物中の一古典とも云ふべきものである。

近世經濟學說史 高橋誠一郎著

政治ライブラリーの第八巻として、昭和三年に出版された。著者自ら冒頭に、

——本書は大正十三年、經濟學講習會の需めに應じて毎月二回執筆せる未完稿經濟原論序編中の一部として、經濟學の成立及び發達を略述するを目的とせる條項中、近世經濟學史に關する部分のみを抄出し、之に訂正加筆を施せるものなり。——

講習會の需めに應じて執筆されたものが基礎であるだけに、文章も口語體で、平易暢達。了解し易い。

「参照し、依據し、引用せる諸著はその直接たると間接たるを問はず、成る可く遺漏なく、之を舉示して、更らに本源の資料により深き研究に赴かんとせらるゝ讀者諸君の便宜に供せん」ともされてゐるので、初學者にとつては、前掲「經濟學史研究」よりも有難いものであらう。

内容構成は、

緒言——第一章・古典的經濟學說——第二章・獨逸及び米國に於ける經濟學の發達——各章はいづれも數節に細別され凡ゆる經濟學說が説かれてゐる。

經濟學史 高橋誠一郎著

これは、現代經濟學全集の第七巻で、容易に入手出来る。前二書と併讀するとよい。

經濟學說史 オットマール・シュパン著 鷲野隼太郎譯

本書は、ナチスの全體主義思想にも重要な影響を及ぼした點で有名な、オットマール・シュパン (Othmar Sparrn) の「國民經濟學の主要諸學說」(Die Haupttheorien der Volkswirtschaftslehre, 1910) の第十二——第十五版の翻譯である。

第一章 マーカンチリズム以前の時代

第二章 マーカンチリズム

第三章 自然法

第四章 社會學の根本問題の紹介 (個人主義及び全般主義)

第五章 フイジオクラットの體系への推移

第六章 フイジオクラットの理論的體系

第七章 完成されたる個人主義的理論的體系又は古典派理論體系

第一部 アダム・スミスの勞働體系又は工業體系

第二部 マルサス及びリカードオに依る個人主義的國民經濟學の發展



第八章 獨逸國民經濟學

第九章 ケイリーの樂觀論と歐洲に於ける其の照應論

第十章 社會主義發展の概説

第十一章 國民經濟學の現狀。社會學

附 錄 經濟學說の理論史的考察

斯うした内容である。私も通讀したが、立派な書物だと感じた。單に經濟學史一點張りの説述に陥らず、史上の學說を紹介するにも、現代の學說と比較對照して讀者の理解に資してゐる。また、社會學その他經濟思想史を學ぶ上に必要な學問についても、要領よく教示してゐる。邦譯書は、大正十五年に初版が出、更らに、昭和五年に、改訂されてゐるやうだ。翻譯も巧妙で、讀み易い。

經濟學史概論 波多野 鼎著

波多野教授が、九州帝國大學に於ける講義のプリントを基礎として、書き上げられた書物である。教授は最近での名著「經濟學入門」や「統制經濟講話」を物された人、従つて、こゝに掲げた「經濟學史概論」に就いても、今更ら、私が彼を書くまでもない。それで、教授の「本書敘述の態様」について、教授自身の言葉を引用する……。

一、經濟學史は一般文化史の側面であるから、一切網羅的取扱は當然之を排し、横の關係では當該時代に對して、縦の關係では經濟學の全歴史において、重要性を有つ學說のみを敘述の對象とした。

二、思想史的 (ideengeschichtlich) にはなく、主として學說史的 (dogmengeschichtlich) に敘述し、かくして、現代經濟の理論的把握への一の鍵を提供しやうとした。即ち所謂經濟原論に對する重要な一補助學科として役

立たしめやうとした。

三、代表的經濟學者の重要な所説は、成るべくこれを引用し、獨斷的曲歪的斷定に陥ることを避けたが、しかしそれ等のものを單に羅列的に紹介するに止めず、常に一定の解釋を下し、その理解を深めるに努力した。

教授のこの態度には、私も學ぶところが多かつた。私も多分に教授の執筆態度に共鳴して、この入門經濟學「經濟學史」を書いた。出來上つたものは、無論、それぞれの書き方から、違つてはゐるが、執筆の態度は共通の點が多い。その意味で、讀者は波多野教授の書物をも、是非、併讀せらるゝやうに希望する。

經濟思想史論 八木澤善次著

この書物は、八木澤氏が「昔に内部的に經濟思想それ自體の内容的變化を辿るばかりでなく、外部的に經濟思想が、一般社會思想の中に於て、また經濟科學が一般社會科學の中に於て、如何なる變化過程を辿つたかを、瞭かにしなければならぬ」との目標の下に、努力された著述である。よくその狙ひが的中して、手頃な經濟思想史論となつてゐる。

經濟學者の話 加田哲二著

内外古今の經濟學者五十餘人を拉し來つて、その學說思想の概要から、學者の爲人までを、極めて要領よく、紹介されたものである。その意味で、立派な、入門的「經濟學史」であると思ふ。興味深く、經濟思想史の全貌を把握することが出来る。わたくしも、この書物によつて、多くの點で、啓示された。

經濟學史の基礎概念 住谷悅治著

經濟學史要論 堀 經 夫著



- 經濟學前史 高橋誠一郎著
- 經濟學說史研究 山口正太郎著
- 經濟學史 濱田健二郎著
- 經濟學史 イングラム著・米山勝美譯
- 經濟學史研究 福田徳三著
- 經濟思想史 ヘネー著・大野信三譯
- 經濟思想發達史 沖中恒幸著
- 英國資本主義成立史 野村兼太郎著
- イギリス經濟史 野村兼太郎著
- 近世歐洲經濟史 瀧本誠一著

終りの三著は、經濟學史の背景を成した經濟事情を知るために、頗る有益である。特に掲げた次第である。

### 三、各章別の參考書

#### ▲第一章「經濟學史の意義と必要」の參考文獻

第一章の「經濟學史の意義と必要」については、特に參考書を擧げる必要もあるまい。大抵の經濟學史書には、始めにこのことが、それぞれの著者の立場から、説かれてゐる。それらを、注意して、讀んでいたゞけばいゝと思ふ。

#### 第二章「經濟學の誕生」の參考文獻

茲では、アダム・スミスに就いての、主要な書物を掲げて置く。

- 富論 スミス著・氣賀勲重譯
- 富論 同・竹内謙二譯
- アダム・スミスの經濟思想 谷口彌五郎著
- アダム・スミスの國債租稅並に自由貿易に関する研究 堀江歸一著（堀江歸一全集第一〇卷）
- アダム・スミス生誕二百年紀念號 理財學會編（三田學會雜誌紀念號）
- アダム・スミス生誕二百年紀念論集 東京商科大学商學研究編輯所編

#### 第三章「貧乏の哲學」の參考文獻

マルサスの思想に関する主要な參考書を掲げる。

- 人口論 マルサス著・寺尾琢磨・濱田恒一共譯
- マルサス人口論 同著・三上正毅譯
- マルサス經濟學原理 同著・吉田秀夫譯
- マルサスと彼の業績 ジェームス・ポーター著・堀經夫・吉田秀夫共譯
- マルサス批判の發展 吉田秀夫著



第四章「分配の經濟學」の參考文獻

こゝでは、リカルドオに關する主要な書物を拾つておく。

經濟學及課税之原理 リカアドオ著・小泉信三譯

リカアドオ研究 小泉信三著

リカルドオ研究では、小泉博士が第一人者と定評される。右の二著も、是非、精讀をすゝめたい。

リカアド經濟原論 リカアドオ著・堀經夫譯

リカアド アルフレッド・アモン著・阿部勇・高橋正雄共譯

リカアドオ貨幣銀行論集 リカアドオ著・小畑茂夫譯

勞働價值説發達史上に於けるスミス並リカルド 請川健藏著

地代論 ロードベルトス著・山口正吾譯

第五章「仿よへる經濟學」の參考文獻

J・S・ミルについての參考書を示す。

經濟學原理 ミル著・戸田正夫譯

ミル經濟學試論集 ミル著・末永茂喜譯

ミル自傳 西本正美譯

第六章「セイの經濟思想」の參考文獻

ジャン・バティスト・セイ經濟學 セイ著・増井幸雄譯

佛蘭西經濟學說研究 増井幸雄著

第七章「恐慌の經濟學」の參考文獻

恐慌學說 經濟學全集第四卷

恐慌に關する諸學說 谷口吉彦著

恐慌論 近藤年彦著

恐慌論 パートン著・古仁所豐譯

第八章「限界効用學派の經濟學」の參考文獻

限界効用學說史 アモン著・楠井隆三譯

ジエボンス經濟學原論 ジエボンス著・小田勇二譯

ジエボンス經濟學純理 同著・小泉信三譯

埃國學派の價值學說 波多野鼎著

埃太利學派經濟學 荒木光太郎著



第九章「歴史派經濟學」 第十章「新歴史派と社會政策學派」の參考文獻

ドイツ經濟思想史 加田哲二著

李氏經濟論 リスト著・大島貞龍譯

國民經濟學原理 シュモラー著・山田伊三郎譯

企業論 シュモラー著・増地庸治郎譯

第十一章「新抽象經濟學」の參考文獻

マーシャル經濟學原理 大塚金之助譯

マーシャルに據る經濟學講義 佐原貴臣著

産業貿易論 マーシャル著・佐原貴臣譯

經濟學原論 チャップマン著・犬丸秀雄譯

尙ほビグウの「厚生の經濟學」(Economics of welfare)にも、たしか、邦譯があると思ふが、その正確な名稱を遺憾ながら詳細にし得ない。

第十二章「全體主義の經濟學」の參考文獻

全體主義の原理 シュパン著・秋澤修二譯

ドイツ計畫經濟 福田喜東著

イタリア計畫經濟 内田源兵衛著

ナチスの哲學と經濟 ヘルマン・グロツクナー著・秋澤修二譯

第十三章「轉換期の動態經濟學」の參考文獻

轉換期に於ける政治經濟思想 加田哲二著

統制經濟と景氣變動 武村忠雄著



著者略歴

慶應義塾大學經濟部を卒へて直ちに時事新報社に入社。地方の警察、裁判所、縣廳廻りを振出しにつぶさに新聞記者修業の辛酸を嘗む。政治部、政經部記者を経て論說委員となり、縦横の筆を振ふ。過勞の果大患にかゝり、昭和九年春以來まる三ヶ年間、筆を捨て、専ら讀書と療養の生活を送つたが、昭和十二年以來、再びペンを執つて立ち、多くの經濟評論を物した。一時、財政經濟時報を主宰す。現に生産擴充研究會調査部長として、實際問題の研究により、從來の理論的偏傾を是正せんと努力中である。著書は、「長期建設と農業政策」「經濟學の新傾向」その他二三を數ふ。

昭和十五年二月十五日印刷  
昭和十五年二月二十三日發行

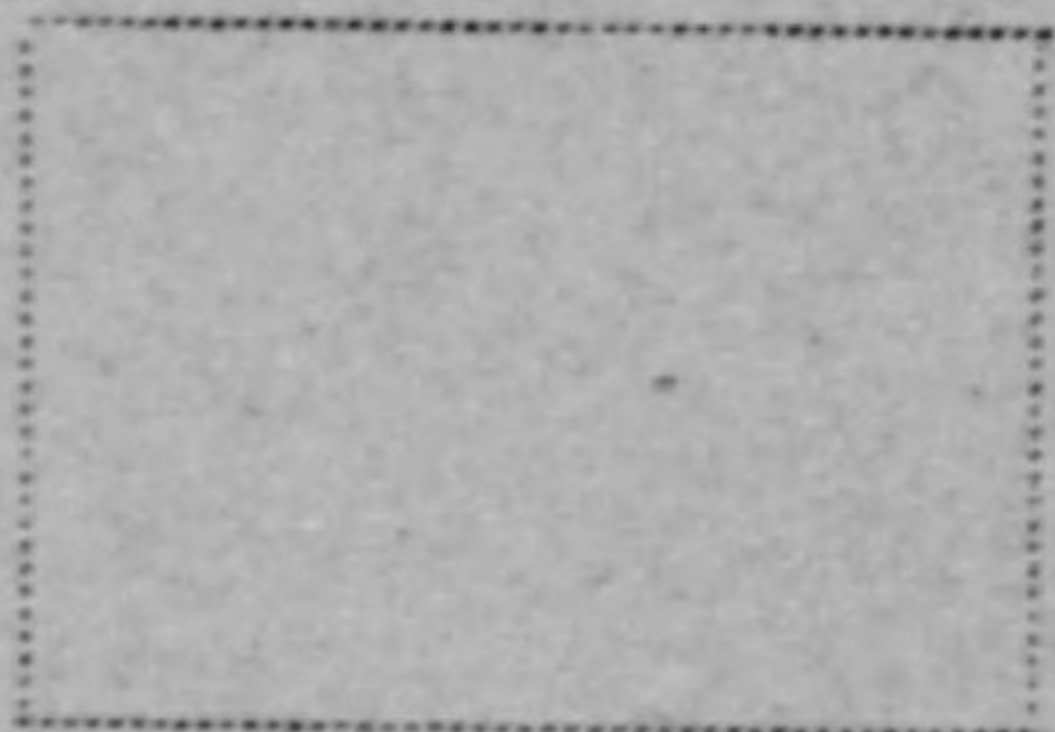
經濟學史

定價二圓二十錢

(大島製本館)

入門經濟學

2



著者 田沼 征

發行者 東京市麹町區麹ヶ關三ノ三 石山 皆男

印刷者 東京市下谷區二長町一 山田 三郎 太

發行所

東京市麹町區霞夕關三ノ三

ダイヤモンド社

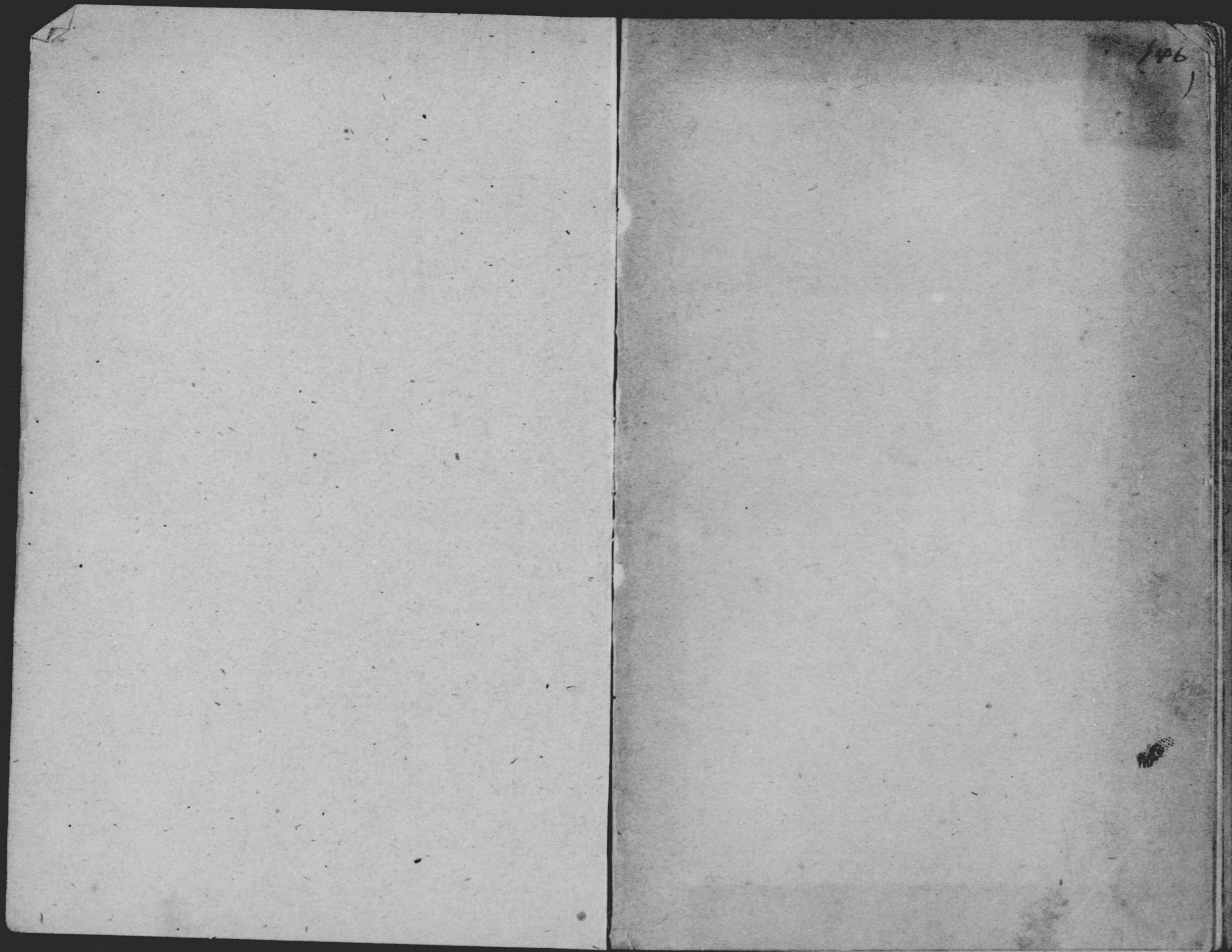
電話銀座四一五五・振替東京二五九七六

大阪支局

大阪市北區中之島(朝日ビル)  
電話北廣五七八八・振替大阪五九八〇

(凸版印刷株式會社印刷)







791  
27



